不治の心臓病と闘う愛の記録

限りある日を愛に生きて

草薙実（くさなぎみのる）・紀子（みちこ）

限りある日を愛に生きて

著者　草薙　実
草薙紀子
発行者　下野　博
発行所　株式会社　立風書房
東京都品川区東五反田3—6—18
電話 447-1191（代表）
〒141 振替東京 74493
印刷所　信毎書籍印刷
美術版画社

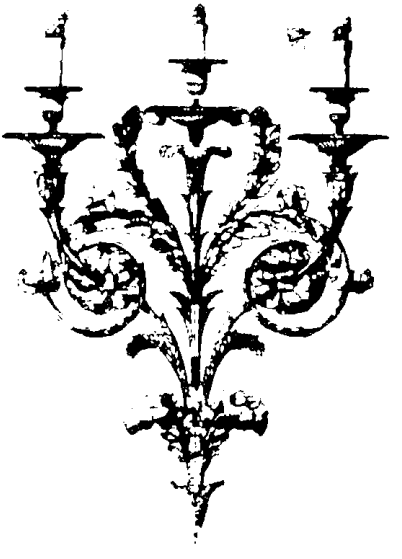
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

©M. kusanagi 1974

不治の心臓病と闘う愛の記録

限りある日を愛に生きて

草薙実・紀子



立風書房

限りある日を愛に生きて

目次

第一部

パンドラの箱……8
死の影におびえて……20
一方通行……24
妹……28
生と死のあいだ……32
血と汗……36
死んで花実が咲くものか……40
愛の奇跡……45

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

菊の花……54
どうしても生きたい……64
前夜……68

第二部

手術……78
祈り……84
凱旋……87
不死鳥のジャンヌさまへ……94
もしもそうなら……97
ソクラテスとルージュ……99
傷だらけの月日……106

第三部

最初のデート……118

はたらく仲間……126
父……132
もう一人ではありません……137
ゼロからはじまるぼくら……144
秋の雨……156
たとえ短い命でも……162
死神とたたかえ……165
内祝い……177
結婚宣言……183

第四部

あと四年待ってほしい……188
服部先生……197
鳩の巣……201
テレビ結婚……207

あたらしい家族……212
父と母と兄へ……218
愛の証人……224
新居……232
黒い訪問者……235
いのちの証人……239
おわりに……246

装幀・山田　脩

第一部

パンドラの箱

一九六二年十月三日、秋である。

東京の空は、めずらしく晴れわたっている。人や車が繁くなる前の、おだやかな早朝のひととき、それは、インクのにおいのまあたらしい朝刊をひろげて読むのにふさわしい。

二つ折りになった朝日新聞をひろげて都内版から読みはじめるのが、ぼくの習慣である。そこには、ぼくの身近なニュースがあり、飾りっ気のない都民のすがたがあるからだ。

あそこの米屋のじいさんは、菊づくりの名人で今年も大輪を咲かせてご満悦。ニコニコ顔のおじいさんが、自慢の菊と一緒に写真になったりしていると、こちらもつられてうれしくなってしまったりする。

都内版には、そんな親しさがあふれている。それと、もう一つのたのしみは、「読者のひろば」である。

「水道局にもの申す。水もろくろく出さないで、水道料金取るという。そりゃあんまりな知事さんよ、何とか解決たのみます」

「うちのかわいいコッカースパニエル君に、いいお婿さんを紹介してください。お礼に産まれた仔犬を一匹さしあげます」などなど、まるでパンドラの箱をひっくりかえしたような、江戸っ子のにぎやかさである。

けさは、何が出てるかな？

ある、ある。〝妹に激励の手紙を〟というのが、トップにある。興味をおぼえたので、その一文を読んでみた。

「心臓病で話題になった栄介ちゃんがなくなってから一年。二十一歳になる妹が、僧帽弁閉鎖不全症という、心臓病手術でも最もむずかしいといわれる病気で、東京女子医大病院に入院しました。

メキシコの学会に出席中の榊原先生のお帰りを待って今月二十四日に手術を予定されています。こうした不幸な病気を背負って、死と対決している病人が、どの病室にもいっぱい。

そしてベッドの空くのを待っている全国の患者たち。第二、第三の栄介ちゃんたちがたくさんいることを、毎

日妹を見舞うたびに思い知らされました。
手術を前にしての不安な患者の気持ちは、家族の励ましの言葉だけでは取りのぞくことができません。皆さんの激励のお手紙などをお寄せいただければ、こんなにうれしいことはありません。
妹のあて先は、新宿区市ケ谷河田町、東京女子医大付属日本心臓血圧研究所四〇一号室伊藤紀子です」
いつもの調子で、面白半分に読みおえたぼくは、一瞬ギクッとした。
命をかけておそろしい病気と闘っている紀子さん。不安とおそろしさでおびえ続けている紀子さん。どんなにつらい毎日だろう。
二十一歳といえば、まだ感じやすい娘ざかり。あれもしたい、これもしたいという年ごろなのに、健康な人から置きざりにされて、じっとかなしみに耐えている紀子さん。
ひとりの人間のいのちは、地球よりも重い。
ぎりぎりの死地にまで追いこまれながら、きっと回生の望みをつないでいる紀子さんに、ぼくは、はげましの手紙をあげようと心に決めた。

ぼくの頭の中は、そのことでいっぱいになった。ぼくは、その時新聞配達のアルバイトをしていた。
この年の三月、ぼくは、北海道の田舎の高校を出て、大学で勉強を続けるために東京へ来ていたのだ。
夜の明けない四時ごろから、汗だくになって新聞を配り、ようやく人が起き出したころには、一仕事が終わって道ばたにすわり、新聞を読むならわしだった。
そして今、ぼくは、自分の配達している新聞で、この投書に出会ったのだ。興奮した顔つきのまま、ぼくはベダルを踏んで、狭いアパートに帰った。

(はじめての手紙)

拝啓、病気のために不安な毎日を送っている妹にはげましの手紙を!との心優しい兄上様の切望に少しでもおこたえしようと、東京のはずれに住む若者が、見も知らないあなたに、お手紙をさしあげる失礼をどうかお許しください。
新聞によりますと、あなたは今ご病臥中とのこと、くわしいことはわかりませんが、なかなかたいへんなこと

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

だろうと思います。

ぼくもかつて、仕事の不慣れから大怪我をして、一年余りも病院ぐらしをした経験がありますので、何だかひとごとではないような気がします。

今、そのころの闘病生活を思い出し、ご病気のあなたに何かお役に立てたらと、さしでがましくもこんなお便りを書いています。

●たださえ未知の淑女に、紹介もなしにお便りするのですから、失礼きわまりないことなのですが、失礼ついでにもう一つ。

どうか、このお便りを、「礼儀にかなっているかな?」などと、虫めがねで丹念にお調べなどなさいませんように。気楽に、「ああ時間の浪費だわ!」と思い思いしながら、何気なくさらっとお読みくださって、ポンと屑かごにお捨てください。

そしてあなたは、今度はこんなセリフを言ってくださればいいのです。

「退院はいつがいいでしょうね」

ぼくの経験では、一般に病気の人は、「笑いなどあまり高尚な感情ではない」と感違いして、一生懸命深刻がるものです。でも、それでは病気に負けてしまいます。つとめて建設的な考えを持ってほしいと思います。

ぼくが手術を受ける前の心境は、ざっとつぎのようなものでした。

追いつめられたという点では、死刑囚みたいなものです。もちろん体験したことはありませんが。しかし、病人と死刑囚の大きな違いは、罪の意識の有無でしょう。

その病気に、たいして関係のない過去のあやまちを棚おろしして贖罪するなんてのは、およそバカバカしいことです。ですから、あなたの病気も、これは自分のせいでなったんじゃない。たまたま運悪く、それこそ落雷にでもあたったような、奇跡的な運の悪さで、自分は今こうして病気とたたかわされている。

広い世の中には、自分よりもうんと悪いことをした奴が、安閑としている。それを思うと、とても自分などバカらしくて死ねたものじゃない。

それに、第一理屈に合わない。

死ぬんなら、そいつらの方が先だ。人生七十余年というのに、自分はまだはたちそこそこだ。あと五十年は生きる権利がある。親に育ててもらった減価償却もすんで

いないし、恩返しもしていない。
ちなみに、巷に五万といる神さまを見ると、やれご利益だ、おはらいだ、商売繁昌だ、ダンプカーの交通安全お守りだ、コロッと病気が直ったのと、金をまきあげること、まさに資本家のチャンピオンです。
さすれば、商業意識の発達した神さまが、まだご利益代もさし上げていない人間を、そう簡単に見捨てるわけがありません。何しろまだ支払いがすんでいないのですから。だから自分は絶対助かるのだ、という妙な論法でまず度胸をすえるのです。
さて、いよいよ手術の宣告。
たいてい本人には、前から手術日を知らせることはないものですが、あなたの場合はいかがでしょう。
手術の直前になると、体毛が惜しげもなく剃られますので、来たか！　と気づきます。さあ、もうあとへは引けません。待ったなしです。ぼくも、この時ばかりは実にめまぐるしく心境が変化しました。恋をしてあっさりふられてという気持ちを、十回も続けたようなオイソガシサです。
まず最初に登場するのが、不安という奴。今、多分あなたの舞台で大活躍の、一人芝居をしている奴です。どうもこれが主役の一人舞台みたいですが、どうしてどうして、このあとに素晴らしいお姫さま、いやナイトが登場して、後半のクライマックスをみごとに仕上げるのです。
この、本当の主役こそ、実は、今病気で苦しんでいるはずのあなたの化身なのです。
だから、この本当の主役が、生き生きとした生命の躍動を思わせるように演ずるか、あるいは、罪人のように絶えずおののきながら、スケールの小さいじめじめしたものを演ずるかによって、ずいぶん芝居の出来が違うのです。
たいへん下手なたとえですが、今のあなたは、病気を全部自分で背負っているようにお考えでしょうから、それが手術をお受けになられるにあたって、どんなに分の悪い役まわりになるかを、ちょっとお話ししたかったのです。
試みに、「病気」という字を調べてみましょう。
「病」という字は、もともと正常な健康体を蝕んだ、いわば機能的な障害です。だから、一字でも「やまい」と

言い、ふつう言われる「病気」の意味です。

このような故障は、こわれた自動車が、自分の力で自分を治すことができないのと同じに、あなたの力ではどうにもなりません。ここのところは、あの高名な榊原仟博士とそのスタッフが、あなたに解決を与えてくださるわけですから、言ってみれば、あなたの力ではどうにもならないという点で、あなたは無責任なわけです。

次に「気」の方ですが、これは健康の時でも「元気」「活気」などの言葉があるように、生きている証拠として太陽や米の飯と同様ついてまわるものです。今のあなたは、もっぱらこちらの方で悩まされているわけですね。無理もありません。そうざらに得られる体験ではありませんから、生きようと思えば悩んだり苦しんだりするのは、人間としてむしろあたりまえ。

病気見舞と言えば、何でも慰めさえすればいいという考え方がまちがっていることは、実は病人になってはじめてわかるものなのです。

ぼくは、「病気」という言葉の意味を書きましたが、これも、不安にさいなまれているあなたには、ただことばのアヤか、つまらない気安めとしか思えないでしょう。

しかし、「人生論」など考えることもないほど生き生きとした毎日を送っている時に、そんな書物を読んでごらんなさい。実につまらないものです。

ぼくの論法からすると、「病気」の「病」の方は先生まかせ、「気」の方は？　ということになりますが、これは、あなたのご家族と、あなたの親しいおともだち、それにあなたが早くお元気になられるよう祈っている四百万の朝日新聞の読者（都内版だからもっと少ないかな？）、言ってみれば、〝声なき声〟があなたを励ましてくださるのですから、こんなに心強いことはないでしょう。

あなたを取りまく善意の人々の力がどんなに強いものであるか、もうすぐあなたは、涙とともに実感することでしょう。

さあ、あなたはジャンヌ・ダルクになるのです。それも、フェニックスのように、死なないジャンヌ・ダルクに、これからは、ならないといけない。

幾百万の善意と愛とを楯として、病魔に敢然と立ちはだかってください。

ただ、せっかく得た、いや与えられたこの大事な機会に、蛇足でしょうが、人生の意義を今一度考えてみてはいかがでしょう。自らの生を、生たらしめる努力こそ、必ず何ものかを産むのです。

目的なしに、「帆は風まかせ」式の人生では、貴重なこの苦痛が、「痛い」だけの経験に終わってしまうでしょう。そうは言っても痛いものは痛い、苦しいものは苦しい。たしかにその通りです。

それを越えるものは何か！

それは、他でもない、あなたの生きようとする意欲です。それはまわりの人が手助けできないあなた自身の力です。

どうか、「気」をしっかり持ってください。

世の中にはいろいろなスタイルの神様がいますが、安易に流れて、誘惑されないようにしっかりしてください。生得の信仰があれば、それに従うべきです。

ぼくは、手術がすんで麻酔から醒めた時、ああ生きていたんだなあ、と不覚にも感激の涙を流したものです。

ちょっぴり塩辛くて、人をふるい立たせ、いのちの味がする食べものは、この涙のほかには、おそらく帝国ホテルのメニューにもないでしょう。

今度は、あなたがそれを賞味する番です。

ゆっくりと、噛みしめながら味わってください。

あなたの病室の窓からは、星や月や太陽や雲が見えますか？

ガラスが曇っていたら、拭いてもらいなさい。

心の中まで澄みきった気持ちで手術をむかえられるように、身のまわりを整えておくのもいいでしょう。二つめの失礼が、とんだ失礼になりまして申しわけありません。

しかし、悪意はないのです。どうか、生き抜くのだ！という実感を、しっかりとあなたの胸にきざみつけて、来るものすべてに耐えてください。

お家のみなさんのご心痛も、いかばかり深いことでしょう。

早く早く、健康なからだを取りもどしてください。

さあ、お約束にしたがって、ポンと屑かごにお捨てく

ださい。

ではまた後ほど……

一九六二年十月三日

伊藤紀子様

草薙（くさなぎ）　実（みのる）

（紀子の記録）

四人兄姉の末っ子として生まれ、苦労らしい苦労、不自由らしい不自由も知らずに、一九五九年三月、私立の女子高校を卒業しました。そのまま就職もせず、大学に

健康そのものだった高校時代。二年生の運動会のとき

も進まず、家の仕事を手伝うことになりました。

からだはとても健康で、口のわるい姉たちから「シャバンテス」の異名をとるほど太っていて、かぜを引くこともない丈夫な娘でした。

卒業した年の六月、とついだすぐ上の姉が初産（ういざん）をむかえることになっていましたので、わたしが、その姉の身のまわりの手伝いをひきうけることになりました。

妊娠してから健康のすぐれなかった姉は、無事に男の子を生んだとはいうものの、やはりからだの調子がすぐれず、ひきつづきわたしが、姉の世話にあたりました。

からだの弱い姉をかばいながら、長男の正巳（まさみ）のめんどうを見てやるという生活が二年半も続いたころから、わたしはだんだんやせていきました。

はじめのうちは、原因もわからず、「年ごろだからスマートになったのよ」と姉にからかわれるのを本気にして、そのまま気にもしていませんでした。

ところが、一九六一年のクリスマスをむかえるころになって、その衰えかたが、ふつうではなくなりました。卒業した時四十九キロもあった体重が、四十一キロに減ってしまい、とても、かぜをひきやすくなりました。

そして一度かぜにかかると、なかなか治らず、動悸がはげしくなったり、めまいをおぼえたり、根気が続かなくなったりして、急に寒がり屋になりました。

ゆびやくちびるが、少し紫色になって、寒さがからだにこたえるようになったのです。

それでも、寝こむほどではなく、もともと元気でしたから、病院で診てもらうこともしないで、そのままクリスマスをむかえました。

その年のクリスマスは、高校時代の親友の家ですごすことになっていましたので、わたしは、晴着を新調したり、おめかししたりして、二十五日の晩のクリスマスパーティに出かけました。

「あーら紀子、すっかりスマートになったじゃない？恋知りそめし乙女、ってとこかな」

そんなひやかしがうれしく聞こえるほど、その夜のパーティはにぎやかで、若さが充ちていました。

時間を忘れて踊ったり、うたったりしているうちに、わたしはまためまいを起こして、息が苦しくなって来ました。

いけない！　どうもからだの調子がおかしい。にぎやかな座から離れて、ひとり気をしずめていたわたしは、そのときやっと、お医者さんに診てもらう気になりました。

前の年のクリスマスは、徹夜をしてもちっとも疲れなかったのに、今年はどうしてなんだろう。

友人の家で夜を明かしてから帰宅したわたしは、くたくたに疲れていました。

「顔色がわるいぞ。二階へあがって少しやすんでいなさい」

兄にうながされるまま、食事もとらずに寝こんでしまいました。それからどのくらいたったでしょうか、気がついて見ると、あたりはまっくらやみです。

前の晩から何も食べていなかったわたしは、急に空腹をおぼえ、階下に降りるため床を立ちましたが、いきなりガーンと胸をつかれるような激しいショックを受けて、その場に倒れてしまいました。

物音におどろいた母と兄とが、階段を駆け上がってきましたが、ふたりの顔も、わたしにははっきりわからないほどでした。羽織ったセーターの上からも、はげしい動悸が脈打っているのがわかりました。わたしの突然の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com